

導入 挨拶と都賀の土地会堂の話

おはようございます。日本国際飢餓対策機構ハンガーゼロの巡回牧師をしています高橋秀幸と申します。ハンガーゼロは、霊的な、そして肉体的な飢餓撲滅のための働きをしています。本日は、みなさんとともに礼拝させていただけますことを心から感謝しています。

私は神学校を卒業しておなじ千葉市にある教会に赴任しました。その教会は当時、開拓12年が経った頃でした。私で日本人牧師は二代目。先代の牧師の時から牧師館は同じ場所に借り続けていましたが、会堂は、開拓当時から5か所目を数えており、5か所目で不思議にも、貸主は全く違うのですが、牧師館の隣に移ってきていました。築何十年にもなる古い平屋。中学生対象の集会をやると中学生の女の子は入りたくない、と言うような建物でした。大変なことが多かったのですが、何をするにも大体同じメンバーでやりますので、楽しいこともたくさんありました。ある年に、牧師館が3年以内に取り壊されると大家さんから聞きました。実は、この牧師館、二軒分の広さを一軒で使っており、空いている一軒分を駐車場として使わせていただいていたのです。その当時は隣がお話したように教会。めちゃくちゃ古かったのですが、これで完結していたんです。ですが、その牧師館が使えなくなる・・・間接的に出て行ってくれと。そこで、なんと、怖いもの知らずというのはこういうものかと思うのですが、とても教会の体力的には無理だと思われましたが、土地会堂に向けて話が進んでいくことになったのです。小さい教会だって夢がある。そのために、ずっと積み立てはしてきました。しかし、その積立は、結果的に私たちが購入した土地の2坪分の金額でした。この土地会堂の話を団体の地区でも祈っていただいたのですが、その時、なんと、神学校時代の恩師の一人が、礼拝メッセージに行くよ、と言ってきてくださったのです。たぶん、私が暴走しているんじゃないかと心配して見に来られたんだと思います。土地会堂計画は、当初、建物を建てることのできる市街化調整区域の物件を念頭にしていました。それは、比較的安く、少し広い物件がある可能性があったからです。そして、祈りの中で、良い物件が見つかり、教会でもそこにしよう、と決めかかったとき、なんと、初歩的なことですが、こういう場合は、法人格がないとダメらしく、私たちの教会は法人格がなく、どの教会や団体の包括法人下にもなかったのです。開きかけた扉がパタリと閉まってしまいました。進み始めた土地会堂・・・私たちは祈りました。しかし、より高い物件を探すことになり、経済的にはかなり無理をすることになることがわかっていました。そのとき、私はこれじゃ、進めない、どう考えても足りない、そんな思いが湧いてきました。挫折かな、と思った私に、主はみことばを示してくださったのです。マタイの福音書14章に記されている五千人の給食の記事です。四つの福音書にはすべて収められている出来事ですが、それらを総合して考えると、イエスさまは、ご自分のもとに集まっていた人たちを食べさせるために、弟子たちにテストをさしたんです。「あなたたちでどうにかしなさい」と。すると、ある弟子は、二百デナリ

のパンでも足りないですと、頭で計算して無理だと判断しました。ある弟子は、たまたま知り合いになったのでしょうか、少年が持っていたお弁当を差し出して、「これしかありません」と言ったのです。しかし、イエスさまは、こういったんです「それを、ここに持ってきてなさい」 それとは直接的には少年の持っていたお弁当です。ですが、イエスさまは二百デナリのパンでも足りないと言った、その思いとか、これでは無理ですという思いのすべてを持ってくるようにと言ったのです。するとどうでしょう。結果はみなさんご存じの通り、イエスさまは、「こんなにあるじゃないか」と言わんばかりに、あまり余るほど増やされたのです。私たちの教会は、これしかない、ではなく、あるもの、そしてこれからささげられようとしているもの、またお借りできるもの、すべてをささげることにしたんです。すると、周りからは私の暴走に見えたかもしれない土地会堂は、私たちの想像をはるかに超えた場所に、想像をはるかに超えたものが与えられたばかりではなく、そのために必要な額になるまで、いろいろなところから助けが与えられて、必要額になったとたん、ぴたりと終わったのです（それは周りは知りません）。みなさんに成功談としてお話したのではありません。みなさんはこの話を聞いて、どう思われるでしょうか。本日のお話の導入としてお話させていただきました。

本論 ない、ない、じゃなく、あるものに目を向ける

本日、読んでいただいた箇所は、預言者のエリシャのもとに、一人の女性が連れて来られたことから話が始まっていきます。この女性は、1節によると預言者をしていた者の妻であり、その夫の預言者は死んでしまったようです。読んでみてわかりますが、この女性には債権者がいて、借金を支払うように求められていて、できなさそうなので、子どもを奴隷として連れて行くような危機になっていたようです。時系列で考えると、夫が死んだから借金をしたのではなく、夫の存命中にすでに借金をしていたようですね。それが夫の死によっていよいよ立ち行かなくなったということです。この債権者はあくまで律法の規定に従って接しているようですが、いずれにしても、この女性は慢性的に貧しかったようすし、子どもを失ってしまうというような危機が迫っていたのです。

ないものに注目する心

エリシャはこの女性にこう言いました、「何をしてあげようか。私に話さない。あなたには家の中に何があるのか」と。このことば、おそらくは、二つの質問であると思われます。何をしてあげようか、との質問に女性は答えなかったのだと思われます。くれるものは何でも欲しかったでしょう。でも、彼女は答えることもできずにいました。するとエリシャは、家に何があるのかと言ったのです。ここで注目したいのが、この女性の最初の姿です。彼女はなんと答えましたか。「このはしためには家の中にはなにもありません。ただ、油の壺一つしかありません」 この時点での彼女の心境が凝

縮されています。なぜなら、**第一に**、彼女は、「家の中には何もない」と答えたのです。エリシャが問うた、彼女の今の状態を改善させるための何かが、家の中には何もない！！というのです。しかし、彼女は、「油の壺」があることは付け加えています。でも彼女の中では、その油の壺が何になるのか、必要なものだとは思われてはいないのです。それが何になるのか・・・と。

ここまでお話しして冒頭でお話した五千人の給食の弟子たちを思い出されたでしょうか。弟子たちは、イエスさまのことばを受けて、自分たちで何とかしなきゃならないと思いましたが、ある弟子たちは、頭だけで考えて、「まったく手元にない！！」と考えましたし、ある弟子は、わずかなもの、それが何の役に立つのか、と考えました。エリシャのもとにやってきた女性と同じだったのです。

私たちは、どうでしょうか。私は、小さいころからずっと自信がなく、びくびくと人目を気にして生活するようになりました。一方、それを打ち消すように努力して、理想の自分を作ろうと努力しました。相反するものが私の中に共存していたのですが、心の中では、いつも「自分には何もない」という思いと「これしかない」という思いが占められており、生きるのに苦しんでいました。みなさんはどうでしょうか。冒頭でお話した私がいました教会も、とても厳しい状況でした。何もない、何も持っていない、無理だ、といつも思っていました。私はそのような中で牧会していて、いつもこんなに教会が小さいのだから、何をしても無理、会堂もボロボロで人は集まらない。救われる人なんか、いないんじゃないか。いつもそのように考えていました。私たちは、持っていないものに目を向けてしまう時に、それはどんどん負のスパイラルを生んでいきます。あれもない、これもない、これはあるけど、そんなもの何の役に立つのか・・・いや、しかし、この本日の箇所は、私たちが本当に目を向けるべきところを指し示すのです。

あるものを探すように

エリシャは、ここで、この女性が「これしかない」と思ったものに注目させるのです。エリシャはこう言いました。「外に行って、近所の皆から、器を借りて来なさい。空の器を。それも一つや二つではいけません」 エリシャは、彼女が持っていた、おそらくは小さい油壺にまずは注目させました。そこには少量の油が入っていたことでしょう。そして、何かが入っているものではなく、空のでもいいから、できるだけ多く器を借りてくるようにと言うのです。そして、驚くべきことに、その少量しかないはずの油を、借りてきた器にどんどん注ぐようにと命じました。6節以降を見ると、彼女が借りてきたすべての器が油で満たされたところで油が止まってしまったのですが、そのあとの結果はどうだったでしょう。当初の最大の問題であった債権者との関係は解消されました。つまり、負債はその油を売った代金で支払われました。そればかりではなく、彼女はその残りで生活出ようになったのです。これも、イエスさまの五千人の奇跡の記事と同じです。

この出来事から私たちは学ぶべきことがあるのではないのでしょうか。まず、**第一に**、私たちは、ないものに目を留めるのではなく、これっぽっちでなんの役に立つのかと思えても、あるものに目を留めるということです。本来、創世記1章の記事を見ると、神さまは、人間を祝福ある者として、そして、「よい」ものとして造られました。それは、言い換えると、「めっちゃいい」という存在です。神さまはみなさんをめっちゃいいと言ってくださっているのです。しかも、目的をもって造ってくださっています。それだけではなく、それを行うことができるように必要なものを与えてくださっているのです。みなさんは特別な存在であるはずなのです。まずは、そのことに目を向けるべきなのです。そして、**第二に**、周りに出て行ってそのあるものが用いられるものを探すということです。私たちも同様です。私たちには必ず神さまから与えられているものがあるはずです。え、これが何になるのか、と思えるものも、です。そして、私たちはそれを用地いられるための器、つまり、私たちが与えられているものが私たちの営みの中で用地いられていくところを探すのです。それが用地いられるのです。私たちの教会の歩みもそうです。特に私のいた教会でもそうでした。私たちには何もない・・・そう思える。でも、神さまは私たちの教会を、私たちを愛し、賜物を与えてくださいます。これしかないと思っていなくても、です。それを用地いることができる器は何でしょうか。

適用 あるものに目を向ける

私たちは、まずは、私たち自身が神さまにめっちゃいいという存在であり、目的をもって造られ、その目的のために必要なものを与えられていることに注目しましょう。その時、「私には何ができるのかな」という思いになり、それが周りに向けた視線になるのです。その視線はまずは、家族に向けられるのです。家族の中で私たちは、何をすることができるか。そして、その視線は、自分の周りの地域に、そして教会に、教会の置かれた地域に向けられるでしょう。そこで、みなさんは与えられたものを用地いて、何をさせていただけるでしょうか。その視線が日本に向けられます。そして、世界へとその視線が向けられるのです。世界に視線を向けた時、そこには、私たちが視線を向けるべき方々がおられます。私たちハンガーゼロは、その視線を向ける先の方々、飢餓と貧困と闘っている方々が、「今日も生きててよかった」と思えるようにともに寄り添っています。どうか、身の回りから始まったみなさんの視線が、この世界の方々へも注がれ、私たちができる一歩を踏み出していただきたいのです。